

---

# 雪中酒話

尋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪中酒話

### 【Nコード】

N0436BA

### 【作者名】

尋

### 【あらすじ】

こちらは「夜半」「梅初月」のボツ版です。

一種の冗談としてお受け取りいただければ……なお、一定期間後には別の話で書き上げて消す予定です。

その友人が彼を訪ねて来たのは梅初月うめはつぎの暮れのことだった。

既に座巻や敷松葉などの冬支度を済ませた庭には今はこんもりと雪が降り積もり、樹齡三百を超える黒松や人の背丈よりも高い庭石、或いは銀に凍った池の上を渡る半月橋の欄干には厚い綿帽子が出来上がっている。先月から降り始めた雪はこの北の地を白々と塗り込めて、日差しすら何処か雪の気配を帯びて灰色に見える。それでも雪の上には点々と小さな雀や野兎の足跡が散っていたり、それらが齧った拍子に落ちたのか南天の赤い実が見え隠れしたりとけっして白のみの単調な景色ではなく、灯籠近くには寒牡丹が濃緋のから傘の霜除けの下で花開き、雪の白と相まって何ともあえかな風情を醸し出していた。

それらを一望出来る縁側に修羅達あさの長 暁色の髪をした阿修羅王はゆったりと胡座していた。

着物は褐色かついろの真綿紬。こぼれ松葉をあしらった羽織を肩にかけたいたって気楽な姿である。

手元には黒泥の湯呑みが一つ。中の茶は冷めて久しく、底に老竹色を滲ませてゆらゆらと緩慢に揺らめいていた。

静かな冬の昼さがりである。

厚く積もった雪は灯籠の中で薪が爆ぜる音すら飲み込み、離れの喧騒もここまでは届かない。ただただ、しんと耳の奥が鳴るような静寂が辺り一帯を閉じ込めている。

その静寂を破るように、ピンと盤の上に置かれた黒石が硬く澄んだ音を奏でた。

「……ふむ」

長の置いた石を見つめ、盤を挟んで向かいに腰を下ろした相手が桜色の唇で笑む。

こちらは落ちついた色合いに身を包んだ長とは対照的に一切の色の無い、純白の長衣を纏っていた。

艶のある白い衣は雪に比してもなお白く、その上にはぬばたまの黒髪が無造作に滝を作り、渦を巻いてこぼれ流れる。

真白な闇を切り取って人型にしたら、或いは庭に咲く寒牡丹のほの蒼い花弁の一枚を取って人型にしたらこういう形になるのではないか　そう思わせるような端正な姿の麗人だった。

その相手はやはり透き通るように白い指先で白石を碁笥から摘み、カツリと盤の上に置く。

一瞬の間。

白く煙る息と共に苦笑を吐き出し、長は「これはもう終局だのう」と潔く認めた。

それに対面する佳人は桜唇の片端を僅かに吊り上げる。

「やはりそなたには勝てる気がせぬ……」

「そんなこともない。お前も大分上達してきているからな……うつかりすると負けそうになるぞ」

パチパチと駄目詰めをしながら笑んだ友人に、長は「今でも四石置いて始めているのだが」と同じように整地しつつ苦笑する。

とは言え長になりたて頃は囲碁の作法すら知らず、仕方がないからと五目並べで暇を潰していたしていた頃もあつたのだから実際には進歩していると言えるのだろう。

整地を終えた結果はやはり上手　白の勝ちであった。

「流石に少々疲れたな……」

碁笥に石を戻しつつ呟いた友人に長は「大丈夫か」と声をかける。

「ん、ああ……まだ大丈夫だ」

「風も出てきた故、中で休まれては如何か」

「……そうだな、そうしよう」

久し振りに楽しくて羽目を外してしまったようだと呟いて閉ざしたままの目の上を抑えた友人に苦笑し、長は手を差し伸べる。

「中へお連れ致そう」

「世話をかける」

「何、構わぬよデュラン殿」

そう言つて長は友人　魔王ディアヴォロス・デュランを抱き上げ、部屋の敷居を一步跨いだ。

長と魔王の付き合いは長い。

もはや人の道を外れて、時の流れからも外れてしまった長は魔王と出会つてからの年月を数えてはいないが、既に彼を知っていた者は鬼籍に入り、地名も何度か変わっていると風の噂に聞いている。おそらく、仮に元居た場所を訪れることがあつたとしても当時の面影を探しだすのは難しいだろう。それぐらいの年月が長が「長」になつてから流れていた。

時の流れから外れるというのは、自ずと時の流れに疎くなることに通ずる。

一秒も一日も、或いは千年も、彼にとってはさして変わりの無い、ただただ周囲を漫然と流れてゆくだけのものではかない。

春の桜も、夏の蝉しぐれも、秋の紅葉も、冬の銀景色も。

最初の数年はそれに驚いた。次の数年はそれを美しいと思つた。次の数百年にはそれに慣れた。そして、彼が長となつてから生まれ、出会い、別れ、死んでいった者達の卒塔婆が丘を埋め尽くす頃、長にとつて全ての景色は等しくただそこにあるものに変わつていた。

修羅達はそんな長の変化を特に否定することもなく受け入れていたが、唯一良い顔をしないのが友人の魔王、ディアヴォロス・デュランだった。

「笑え」

いつの間にか固く強張つたまま殆ど動かなくなつた長の頬を遠慮なく細い指で引っ張つて魔王は言う。

「生きているなら、生きているらしく振る舞え。生きること、感じることがどれほど苦痛を伴おうとも、それを止めるな」

俺はそう教わつたぞ、と白皙に大輪の花もかくやという美しい笑

みを浮かべた魔王は以来、長の為に時々土産を携えて訪ねて来るようになった。

そういつた経緯があつて、今回も魔王は土産を片手にふらりと現れて先程まで長と囲碁に興じていたのだった。

青白い顔をした友人をクッションを乗せた籐椅子に座らせ、長は冷えた室内の温度を上げようと開け放つていたしとみ戸を下げ、障子を閉じ、暖を取る為囲炉裏へ足を運ぶ。まだ灰の上に立てておいた白炭は深い呼吸をしているかのように時折赤く光り、傍に寄るだけでも足元からじんわりと温かみが伝わって来る。それを確認した長は乱れ積もった灰を掻いて平らに均し、少し考えてから炭斗箱から少しの炭を取って、火を付けると元あつた炭の傍に足した。ついでに茶釜へ甕に汲み置いた水を注ぎ、金輪の上にかける。ゆつたりとした暖気が部屋に満ちるまで然程時間は要しないだろう。

一通り室内を整えて横目で魔王の様子を窺うと、友人は閉じて居た目をうつすらと開き「そんな心配そんな顔をするな」と苦笑した。「この体の管理はきちんとしている……」

「しかし」

「止せ、ここまで来て小言を聞きたくはない。口喧しいのは我が家の小姑だけで十分だ」

「そなたが無茶ばかりするからであらう」

奔放な主人の行動に振り回されているだろう銀髪の青年の姿を思い浮かべて窘めた長に、魔王はむつと眉を寄せる。

元々直視するのが恐ろしい程整っている美貌が、そう言う表情をすると妙に子供っぽくなるのを知っているのは今では長だけだ。

今まで積み重ねてきた年月からすれば遥かに年上の友人だが、こう言う時は妙に可愛らしく見えて困るところり思いつつ、長は穏やかに苦笑して「何か温まる物をご用意しよう」と声をかけ囲炉裏の側から立ち上がる。

甘やかしているな、と脳裏をそんなことが過つたが長は「儘よ」

と呟く。

元より決めていたことだ。

この方をただ甘やかす為だけに甘やかす事が出来るのは友人である自分だけなのだから、かつての友人も、家族も、大切な人も全て手放したあの日に決めたのだ。これからはこの方を、何を差し置いても甘やかして、甘やかし続けようと。

大概無理を押し通して道理にしてしまうこの方には、甘過ぎるくらいでちょうど良い。

さて何か茶でも思った長に後ろから友人が「待て」と声をかける。

「どうなされた」

「温めるならば良い物がある」

「良い物、とは」

「そこにある包みを開けてみる」

そこ、とただ声だけで指定され、しかし長は迷わず机の上に置いてあつた風呂敷包みを取る。

友人の土産だ。

すらりと口の伸びる一升瓶を雪輪の描かれた大判の風呂敷で包んである。端で器用に円い取っ手と可憐な羽のように左右に広がる飾りが作られていて、解くが勿体ない出来栄えだ。

それでも、刹那躊躇った物の長は包みを解いて、中から一升瓶を取り出す。手織りの和紙と思いきラベルに懐かしい文字があつた。

「これは……」

「外の土産だ」

「……また、渡界なさつておられたのか」

「何、暫く前だ……流石に戻った直後にこちらに来るような真似は出来ないからな」

この体の管理はきちんとしているしな、と大人げなく皮肉を含んだ口調で繰り返した友人に長は「然様か」と苦笑する。

それに友人は微妙に不満げに唇を尖らせ、それからふわりと破顔

する。

「まあ、お陰でこちらへ持つてくるのが遅くなった……許せ」

「何、お気に召されるな。亦<sup>また</sup>楽しからずや、と古人も申して居ろう」

「……。熱爛にしてくれ」

「うむ」

急に話題を変えた友人の耳が淡い桃色に染まっているのに気付かないふりをして、長は棚から一組の猪口と徳利を選び出す。

ふつくりと円い猪口は剣を握り続けたせいでごつごつと硬くなつた長の大きな手の上ではなお小さく見え、まるでちゃんと座っているような可愛らしさがある。

一方の徳利は細首のすつと伸びた優美な形で、猪口に比べて少々華奢な印象だ。繭玉のような柔らかい白をしており、喻えるなら山辺にひそやかに咲く百合の風情。友人の佇まいを重ねて選んだという逸話付きの一品で、ここぞと棚に収めたきりになっていたのを取りだしたことは 当然友人は知る由もなかった。

それらを出したところで長はふと思い当って「デュラン殿」と振り返る。

見ればいつの間にか座らせていた椅子は空になり、友人は丸窓の腰板の上に横座りに腰掛けていた。誉められた行為ではないが、その横顔が雪灯りに黒々と浮かび上がってはつとするほど美しい。

思い返せばあの時も窓に腰掛けておられたな、と長は嘆息交じりに苦笑して改めて呼びかける。

「肴は如何いたそうか」

「任せる」

「では少々待たれよ」

ぼんやりと半開きの障子の隙間から外を眺めている友人を暫く放っておこうと決め、長は昨日家人の「瑪瑙」から奉納された鮭の一夜干しを戸棚から取り出す。

北の地の川で獲れた鮭のハラスはぼつてりと身が厚く、脂が良く乗った濃い丹色をしているこの時期のご馳走の一つだ。



それを小刀で切り分けて幾つかは用意した火鉢にかけた網の上に乗せ、残りは皿に盛る。

それが焼けるのを待つ間に徳利と猪口を茶釜で沸かした湯で軽く洗い、猪口には冷えぬようそのまま湯を注いでおく。

徳利に酒を注ぐと、ふわりと淡い香りが長の鼻先を掠めた。

これは良い酒だ、と長の口元が無意識に緩む。友人はこれを熱燗にしておもうというのだから、勿体ないやら贅沢やら。残った分は瓶ごと雪に埋めて冷やして飲んでもさぞ旨かろう。

だが芯まで冷えた後には熱燗が良いことに異論はない。

茶釜の湯は熱くなりすぎたので、少しを小鍋にとって雪を加えてちょうど良い温度まで下げる。その中に徳利を首まで浸けて炭を入れた焔炉にかけ、鍋の底から小さな気泡がふつふつと昇って来るのをじっと眺める。時折、囲炉裏の方でかさ炭が崩れ、遠くの方でどおっと積もった雪が落ちる音を聞きながら待つ。

酒の表面がふつと浮いた。

そう見えた所で湯から引き上げ、猪口の中の湯を捨てて軽く付近で拭く。

その頃には炙っていた鮭のハラスも軽く焼き色がついて、そちらの番をいつの間にかしていた友人がニヤリと悪い笑みを浮かべた。

「呑もうか」

「呑もう」

人の杓を外れた者達は顔を見合わせ、互いに笑んだ。

熱燗になった酒からは馥郁たる香りが立ち昇り、猪口を傾け一口含めば舌の上をとろり満たし、喉に滑らせれば胃の腑に落ちてカツと燃え上がる。

ぐつと飲み下して杯を置いた長の口から思わず「くうう」と久しく出すことの無かった満足げな呻きが白い呼気と共にこぼれた。

友人もまた唸ることはなかったものの満足した猫のように紫眼を細めて、唇からほうと艶がかった息を吐き出す。

「良い酒だ」

「誠に」

炙った鮭の一夜干は表面には飴色の焼き目がてろりと輝き、端でほぐせば内側からは若々しい珊瑚色が顔を出す。

修羅の里の厳しい冬、その風雪の下で一夜干された身は余計な水気が抜けて引き締まり、しかし口に含んで噛めばほろりと崩れる。塩を振っただけの簡単な味付けがかえって良く脂の乗った身の甘みを引き立て、噛めば噛むほどじわじわと口の中に旨みが広がってゆく。その絶妙な硬さの身も最高だが、パリリと炙った皮と身のとりわけ脂の乗った部分がまた堪らない。

かと言って一気にががつと食べるなどと言うことはしない。

小さく切った一切れを口に運び、じつくりと噛み締める。その合間に熱燗をきゅつとやる。

向こうではしゅうしゅうと茶釜が白い湯気を立てて、合間にことごと湯の呟く音。

友人は最初の一切れだけをほんの少し口にして、後は猪口の縁を撫でながら長へ渡界した時のことを語る。

そうして窓の外では冬の日が足早に降りていった。

「ああ、そう言えばアレに会ったぞ」

その話が出たのは肴にと切り分けた一夜干しが無くなり、酒も大分減った頃のことだった。

火鉢の上で熱した網でハラミの皮を炙り、ひっくり返していた長はその口ぶりに「はて」と首を傾げる。

「アレ、とはどなたかな」

「半だ」

友人が正しく名を呼んだ刹那、脳裏に浮かび上がった一人の子供の姿に長はああと得心する。

上目遣いの三白眼で、男のような身なりをしていた瘦せた小さな、  
稚い子供。

子供らしい無邪気な好奇心と、容姿に似合わぬ用心深さ、疑いがない交ぜにした眼差しでじっと、魔王の背後からこちらを窺っていた少女。

魔王の後ろを親を慕う雛のようにちょこまかについて歩いていた姿が愛らしかった、と長は懐かしく思い出す。

「相変わらず綺麗な橙を散らしていた」

「左様であつたか…… お元気であられたのだな」

「元氣過ぎるくらいにな」

「またそのようなことを」

いつもながら素直に言えない友人の捻くれた愛情表現を窺めつつ、長はふっと思ひ出して笑う。

そう言えば、彼女もわざわざ友人を蹴ろつとしたり、むやみに噛みつく態度を取ったりしてからそのあとじつと友人の反応を観察していることが多々あつた。そうして友人がその程度のことなら許すと受け入れる姿勢を見せると安堵した顔でまたちょこちょこと近寄り、別のちよっかいをかけるということを繰り返していた。あれは怖い物みたさ、と言うのもあるのだろうが何より相手がどこまで自分を許容して受け入れるのか測っていたのだろう。

（似た者同士、と言うことなのであろう）

見た目こそさっぱり似通つた所が無いが、何かと言えば互いにちよっかいを出しては遊びじゃれていた二人を思い出し、長は知らず笑み綻ぶ。

「何だ、俺の顔を見てニヤニヤして……」

「何、マサキ殿のことを思い起こしてただけのこと……して、如何であつた」

長にはあれからどれだけ時間が経過したのか分からない。

<sup>あした</sup>朝に産声を上げた赤子が夕べに冷たい骸となって雪の下の墓に埋まっている。

長の世界はそう言う世界だ。

長い、人が生きるには長すぎる時を終焉まで存在し続けなければ

ならない長の時間の間隔はただ人のそれとはかけ離れてしまい、かの少女の姿を最後に見たのが果たして昨日か、或いは一月前か、一年前か、或いは百年前か、どれも長にとっては等しい為に分からない。

人の寿命を考えればそう遠い昔では無いのだろうが、と頭の片隅で計算する長に魔王はニイと艶やかにも何処か意地悪く笑い、

「お前が見たあの時からほんの数力月程度しか経過していなかったからな、大した変化は無かったぞ」

大して伸びて居なかったな、とまたへその曲がつたことを付け足す魔王の言葉を何処か遠く聞きつつ、長は二重の驚きに目を瞪る。

一つはその短期に「召喚」と「渡界」の二つを立て続けに友人が行ったこと。

もう一つはそんな短期に二度も、同じ「人間」がこの友人と出会ったという事実。

長は魔王が渡海する理由を正しく承知しているが、その理由から考えるにあれほど再会に遠いところに居る「人間」は居ないのだ。

彼女はその意味では正しく「人間」だ。たとえそれを、彼女の周囲が、誰よりも彼女自身が認めていないとしても長や友人から見れば悲しいぐらい「人間」でしかない。そして「人間」の寿命など長くてせいぜい百五十年が限度。一万年近い時を生きたドラゴンですら偶然の再会を果たしたのは死の直前だったにも関わらず、ほんのわずかな時しか存在できない人間が、何の役割も負わないはずの人間が、この友人に短期間に二度も出会ったという。

そのような限りなく不可能に近い奇跡があの子の身の上に起こったというのか。

「もしや……会いに行かれたか」

「まさか」

あり得ないと思いつつも尋ねれば当然のように即座の否定が返ってくる。

それはそうだろう。

誰よりも彼らを慈しみながら、慈しむが故に遠くにあるしか無い友人だ。

近寄るだけで壊すかもしれないと分かっているながら、好んでの小さく痩せた、いつも疑っているような怯えた目をしていた少女に手を出すことはしないだろう。

ならば、何故。

「……。まあ、事故……のようなものがあってな」

何処か苦い声で告白するのは、それが咎められることだと魔王自身も承知しているからだろう。

ぼんやりと焦点の合っていない紫色の目にうつすらと悔恨の色が混じる。

「それで、落ちた先がアレの実家だったそうだ」

「……そのようなことが」

「まあ、完全に俺の計算ミスだな」

それでも、一応は死者を出すこと無く目的は達成して帰還できたと聞いて長はほっと胸を撫でおろす。しかし同時に沸き上がる微かな疑念。

（誠に、ただの偶然であろうか）

友人がいくら完璧にい近くても過ちの一つぐらい犯すことはあり得る話だ。

だが、その結果としてかつての「招き人」と再会するというのは何か不自然な気がする。

それも、他の誰でも無い、あのじつと瞠った目をした少女と出会うとは。

（……呼ばれたのやもしれん）

突拍子もない可能性が頭の中に閃いて、長は「まさか」と小さく呟く。

「人間」があの人を呼び寄せることなど。

まさか。

まさかそんな。

あり得ない。

それでも長はそのあり得るはずの無い可能性を振り払えずにいた。それは「人間」が、特に思いがけない力を発揮して歴史や世界を手繰り寄せることがあることを、長は誰よりもよく承知していたからかもしれない。

或いは、滞在中ずっと友人の後ろに隠れて、油断の無い目で長の里に居る修羅達を見つめ続け、距離を取っていた少女の姿が脳裏にあつたからかもしれない。

まるで、魔族である友人よりも同じ人間の方がよほど信用ならない、恐ろしい脅威であるかのように。

だからこそ、呼んだのかもしれない。

あの滞在の間に一度も、元の世界にかえりたがるそぶりを見せなかった、あの寂しげな小さな子供だったから。

だからこそ、うつかりそんな言葉が漏れたのかもしれない。

「それで、どうなされた」

「どう、とは？」

不思議そうに問い返した友人に、長は口ごもる。

あまりにも馬鹿げた質問だったからだ。

それでもことごとく首を傾げて、此方を読みもせずに待っている友人に、長は躊躇いつつ問いかける。

「マサキ殿をそなたの側に連れてゆかなんだか」

「……。いや」

答えた友人の声は酷く冷え切って、乾いていた。

「そんなはずが無いだろう」

「マサキ殿はそれを望んでおられたのではなかったか」

「さあ……聞いたことが無い」

だからいつも通りだ。何も変わらない。

淡々と繰り返した友人に、長は眉を顰める。

友人のやっていることは正しい。

自分達の存在はあまりに重すぎて、ほんの僅かでも彼らに干渉するには躊躇われる。神になりたい訳ではないのだ。

だが、あの幼子が望んだのならば、この永遠に近い残りの月日のうちのごく僅かを、彼女の為に割き与えても良かったのではないだろうか。

放っておかれた鮭皮が、網の上でジリリと音を立てた。

「そなたは、あの童を気に入っていたように思っておったのだがのう」

「……否定はしない」

嘆息交じりに呟いた長に、友人は少し笑う。

「あんな馬鹿は滅多に会えないからな」

「またそのような事を」

「……アレがな」

既に空になっっている猪口を手の中で転がしつつ、友人は何処か懐かしげに目を細める。

「やりたいことが出来たと言っていた」

「……」

「それから、友人になろうと言われた」

だから、置いてきた。

ぼつと呟いた友人に、長は何とも言えない気持ちになる。  
友人だから、手放して起きてきたというのか。

「……そなたが連れ帰れば、あの童の不遇は消える話であろう」

「まあ、その界の価値観の比重の大きい問題だからな」

「それでそなたは良いのか」

「友人と言われてはな」

少しだけ苦笑して、魔王は首を振る。

「どうしても困った時に一度だけ助ける、と言われた。それ以上の手だしはナカバに失礼だろう」

「……」

「こちらが勝手に手を出そうとしたところで、大人しく受けるタマでもないだろうしな」

「む……」

確かにそうかもしれない。

ビクビクと怯えながらも妙にふてぶてしく強気な面構えだった少女を思い出して長もまた漸く小さく失笑する。

【魅了】抜きにしても近寄りがたいくらい的美貌をもった友人を背中側からゲシゲシと蹴る度胸の持ち主だ。

相応に肝も意地も座っているのだろう。

「それでマサキ殿が無く亡くなられても、か」

一拍の間。

「そうだな」

はつきりと答えた友人に、長は黙って少しだけ笑んだ。

「人の問題は人の間で解決すべきことだ。解決できずとも、俺が手を出すべきではない」

「……マサキ殿に聞いても同じことを言いそうなのう」

そなたらは似た者同士故。

くつりと笑って言った長に、友人がきょとりと幼い風情で瞬く。

「似て居ないだろう」

「似ておるよ」

「……似て居ないと思うが」

「マサキ殿もそう仰るだろうのう」

「……それは似て居ないからだろう」

納得がいかない、というように唇を尖らせる魔王に長はただ笑む。意地っ張りなもの、負けず嫌いなもの、人を嫌いになるまいとし



ているところも。

「優しいところも良く似ておる」

「……ナカバはな。俺の場合はただ甘いだけだ」

「そうかもしれないのう」

「……。お前も甘い奴だな」

「どうにも、そなたを見ると甘やかしたくなるのだよ。許せ」

にこりと笑った長に友人は瞬き、それから微妙に嫌そうな顔で「お前はそんなだからしなくて良い苦労まで背負い込むんだぞ」と長の眉間を指した。

しかし長は穏やかに笑んで「好きで負っていること故、そなたは気にするでない」と返すと完全に呆れた顔になる。

「お前が一番甘いな……少し反省したらどうだ」

「何も後悔したことの無い故、反省することが無いのだよ」

しらつと返せば友人の顔がますますふてくされたようになる。

ただ、その八割が照れ隠しなことを知っている長は笑みを深めるだけだ。

「……まったく」

勝手にしろと最終的に拗ねた魔王にいざり寄り、長は下からその顔を見上げる。

「良いのだな」

「……くどい」

冷たい手を取って尋ねた長に魔王はそっぽを向いたまま呟くように答える。

「本当にあれが助けを求めた時に一度だけ、それ以上は何も助ける気は無い……それ以上は傲慢と言うものだ」

それに、と少し躊躇って友人は独り言のように付け足す。

「向こうで、あれが自分なりに満足できる生を獲得できないとはまだ決まっていない」

「……うむ」

それはごく低い可能性ではあるが、零では無い。

しかし、長達が彼女に見た軌道を歩む可能性もまたけつして低くはない。

それでも。

長は友人を見上げ思う。

それでも、この人はごく僅かな人の可能性に、善性に夢を見て、信じようとすることを止めないのだろう。

「今夜はどうなされる」

「……どう、とは」

「外は暗く雪深い故、泊ってゆかれるか」

「いや、俺が戻らないと戸口で恨みがましく待っていていそうなのにー人心当たりがあるからな……」

「……そなた、また意地の悪いことを書き置きなされたか」

「いや、ただ『うちの犬が言う事を聞かないので、人生を見直す旅に出ます。探さないで下さい』というのをあれの額に貼ってきただけだ」

それを見つけた彼の衝撃と悲哀を思いやり、長は「気の毒に」と肩を落とす。

良くも悪くも冗談の通じないひととなりだそうだから、さぞかしシヨックを受けただろう。

「程々になされよ」

「俺は悪くない」

「そうであろう。されど、程々になされよ」

重ねて言われ、友人は少し決まりが悪くなったのか今度は黙ってこつくりと頷いた。

色々とやるべきことに縛られて捻くれ度合いが増している友人だが、基本的な性根は素直なのだ。×××のように。

「雪が止んだ」

友人がふと顔を上げて呟く。

「向こうへ渡るとしよう」

「……気を着けて行かれよ」

「ああ。またな」

「……」

「何だ」

「また、などとそなたが言うのは初めてだ」

「……挨拶しろ、と「友人」に叱られたのでな」

「左様であつたか」

では、またな。

ああ、またいずれ。

挨拶を交わした

(……と、ここまで書いて「冗長すぎる割に、肝心の部分が薄い」という理由でボツにしましたorz)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0436ba/>

---

雪中酒話

2011年12月31日22時45分発行